

1970年代における山口勝弘の創作実践とその解釈について

—— ビデオによる「コミュニケーション」の実現

伊澤 文彦 (福島県立美術館)

本発表は、前衛芸術家グループ「実験工房」に所属した山口勝弘(1928~2018)が1970年代に制作したビデオを用いた作品に注目し、その制作目的と作品形式を明らかにするものである。

作品への従来の言及は、1950年代から60年代にかけて、偏光ガラスを用いた「ヴィトリヌ」シリーズや、蛍光灯を用いた「光彫刻」シリーズなど、既製品と工学的な技術を組み合わせた作品についてのものである。しかし、それは山口の所属した「実験工房」の実践や、日本における「環境芸術」の動向と結びつけられた限定的なものであり、1970年代以降の実践について十分な検討がなされているとは言い難い。

さらに、山口は1960年代後半に隆盛した日本における「環境芸術」の隆盛を牽引した一人と考えられるが、先行研究では「環境芸術」を大阪万博に帰結させる歴史的社会的文脈からの検討が主であり、大阪万博前後の創作実践の変遷について詳細な作品分析は未だ不十分な状況である。

山口は、1970年の大阪万博における自身のパビリオン演出について、観客との〈コミュニケーションの不在〉を語り、万博以降は美術館やギャラリーでの体験を前提とした個人制作から、ビデオを用いた「コミュニケーション」を前提にした公共空間での制作を行うようになっていく。1972年に結成されたグループ「ビデオひろば」の活動は、公共空間でのプロジェクトベースでの作品制作であった。社会的状況との親和性を強めたその活動は、行政からの委託を受けるなど、ある種の積極的な社会とのコミュニケーションの創出が目指されたものであると考えられる。山口が「ビデオひろば」において担った役割や、グループ活動と個々の制作活動への関連にも着目しながら当時の活動について考察する。

また、山口は1980年代以降もビデオを作品素材として断続的に使用し、ビデオ機器と造形彫刻を組み合わせた人工的な空間を「庭園」として提示した。1970年代の活動を考察することで、ビデオを用いた作品に対する更なる分析につなげたい。

本発表では大阪万博前後の山口の創作実践の展開を明らかにするとともに、ビデオを用いた作品における「コミュニケーション」の実現が制作活動においてどのような意義があったのかを明らかにする。

発表では山口の活動を概観した上で、特に1960年代後半~70年代の作品を分類して考察を加える。さらに、1970年代の「ビデオひろば」の活動や、ビデオを使用した作品における制作目的を、歴史的社会的文脈から検討する。

続いて、制作目的とビデオというメディアの結びつきを作品分析によって明らかにし、1970年代の創作実践に固有の作品形式について考察する。

山口勝弘の1970年代の実践およびその解釈について考察することは、単なる作品分析を行うだけでなく日本におけるビデオを用いた表現の検討に寄与することにもつながるだろう。